

日本人と『三国志演義』

——江戸時代を中心として——

井 上 泰 山

一 江戸時代における漢籍の流入

周知の如く、日本と中国の文化交流の歴史は非常に古く、有史以来今日に至るまで、ほとんど絶えることなく続いている、といっても過言ではない。漢字を始めとして、仏教や儒教など、日本人は中国から多くの文化を学び、それによって精神生活を豊かにしてきた。一般的に言って、異国の文化を輸入するにあたっては、人的交流、物品の輸入など、幾つかの具体的な方法が考えられるが、中国の文化を取り込む場合、とりわけ重要な役割を果たしたのが文字資料としての書物であったことは言うまでもない。中国で出版された書物を日本に将来し、それを翻訳して学ぶことによって、日本人は中国から多大な文化的財産を学び取り、それを応用することで独自の文化を築きあげてきた。漢籍輸入の歴史は長く、およそ書物とよべるものが中国で出版されれば、その大部分が、あまり長い時を措かずして日本に伝えられたものと思われるが、本章では、とくに江戸時代に絞って、漢籍流入の様相を探ってみたいと思う。

幸い、こういった分野の研究に関しては、かつて本学の総合図書館館長を勤められた大庭脩教授の貴重な研究成果が残されている。大庭脩教授は漢代の木簡の研究や日中文化交流史の研究で世界的に有名な東洋史の専門家であるが、本稿のテーマに関連して特に重要なものとしては、一九六七年に関西大学東西学術研究所から出版された『江戸時代における唐船持渡書の研究』という研究書がある。この著作の中で、大庭教授は、江戸時代に中国からのくらの書物が日本国内にもたらされたか、その総量を調査することによって、中国文化受容の基礎的な資料を作り上げることを試みている。既に失われた資料も多く、まだ完璧な状態には至っていないようであるが、それでも、この地道な研究のお陰で、江戸時代の中国文化輸入の具体的な姿がある程度明らかになったのも疑いのない事実である。これ以外にも、同氏の古稀を記念して同朋舎から刊行された論文集『象と法と』の中に、「日本に渡来した漢籍の研究手法」、「江戸時代における唐船持渡書の研究——その方法と限界——」、「唐船持渡書」などと題する幾つかの講演記録が収録されているので、ここではそれらをも参考にしつつ、江戸時代に中国の書物がどのような経緯を辿って日本国内に流入したのか、さらには、日本に運び込まれた書物はその後どのような運命を辿ったのか、といった、漢籍の伝来にまつわる幾つかの基本的な問題について、予め確認しておくことにする。

日本の江戸幕府は諸外国との自由な交易を禁止する「鎖国」政策をとっていた。ただし、外国との貿易を全面的に禁止していたわけではなく、オランダと中国だけは例外的に交流を認め、九州の長崎を窓口として、政府の厳しい監視のもとに物資の往來を許可していた。従って、江戸時代に、オランダと中国からは様々な物資が日本に流れ込んでいたわけだが、もちろん、中国で刊行された書物も例外ではなかった。江戸時代が始まった一六〇〇年は、中国の年号で言えば、明の万曆二八年、神宗の時代にあたる。以来、明から清に至るおよそ二七〇年間にわたって、膨大な量

にのぼる漢籍が船に積み込まれて日本国内に運ばれたが、ただし、全ての漢籍が無制限に流入したわけではない。江戸幕府は日本国内におけるキリスト教の布教を固く禁じていたので、漢籍の中にキリスト教の教義に関するものが含まれていないかどうかを厳密にチェックする必要があった。そのため、「書物改め」と称する検閲官を長崎に常駐させ、その仕事を代々世襲させて、書物のチェックにあたらせた。いわば、一種の禁書政策をとっていたことになる。中国からの貿易船が長崎の港に着くと、予め、キリスト教に関係する書籍がない旨の誓約書「齋来書目」を提出させ、「書籍元帳」を作るなど、一定の手続きを経た後に初めて、中国の書物は日本国内に上陸し、競売のルートにのることができた。つまり、「書物改め」という役職は、いわば政府の禁書政策を水際で実行する最前線の役人であったわけだが、「書物改め」が作成した漢籍の簡単な内容説明としての「大意書」は、見方を変えれば乃ち、書物の大要を知るための「漢籍解題」に早変わりするわけで、それが行政の中心地であった江戸に送られた段階で、奉行は、どのような書物が中国から送られてきたかを、ただちに知ることができたのである。こうして、政府の書庫ともいふべき「紅葉山文庫」には膨大な漢籍が蓄積されていくことになった。この「紅葉山文庫」は、現在では「国立公文書館内閣文庫」と改称されているが、その蔵書の多くは、江戸時代に長崎を通じて中国から輸入された貴重な書物である。中国から流入した漢籍が運ばれたのは江戸ばかりではなく、それ以外の地方の行政単位や個人の書庫にも流れ込んだ。尾張徳川家の書庫とも言うべき「蓬左文庫」や、加賀前田家の「尊経閣文庫」を始めとする日本各地の図書館には、江戸時代に中国から伝来した貴重な漢籍群が数多く保管されている。その中には多くの貴重な白話文学資料も含まれており、中国本土で既に失われたものもあるため、かつて孫楷第氏や王古魯氏など、中国の著名な学者が調査のためにわざわざ日本を訪れた事は、よく知られている事実である。

二 『三国志演義』の日本への伝来

ところで、他の多くの書物と同様、『三国志演義』も、江戸時代に長崎を経由して日本に伝わってきたものと思われる。初めて『三国志演義』が日本に伝来した時期を特定することは容易ではないが、現在に残されている個人の読書記録や蔵書目録の類を丹念に調査することによって、日本伝来の時期をある程度推測することは可能である。こうした研究は、日本においては、従来、中国文学研究者よりもむしろ書誌学者や国文学者によって行われてきた、というのが事実であって、長沢規矩也氏や中村幸彦氏あるいは徳田武氏など、著名な書誌学者や国文学者が行った調査によって、『三国志演義』の伝来に関する過去の記録が次第に明らかになりつつある。

まず、中村幸彦氏の論文「唐話の流行と白話文学書の輸入」（『中村幸彦著述集』七、中央公論社、一九八四）によると、現在残っている記録の中で、『三国志演義』の書名が出てくる最も古いものは、江戸初期の知識人・林羅山の著作集に見出すことができるとのことである。『羅山林先生集』附録卷一の慶長九年の状、西暦で言えば一六〇四年の状に、羅山本人の読書目録が付してあり、その中に、『通俗演義三国志』の書名がみえる。また、羅山の随筆と考えられる『梅村載筆』にも、漢籍目録が含まれており、その中に、『西遊記』『列国伝』『全相漢書』などの書物と並んで『三国志演義』の名前が挙がっている。これ自体が羅山の読書目録であるかどうかははっきりしていないもの、ともかく、こうした記録によって、江戸時代の初期には既に、日本の知識人の身近に小説『三国志演義』があったことを窺うことができる。

また、長沢規矩也氏の『日光山「天海蔵」主要古書解題』（日光山輪王寺、一九六六）によれば、寛永二〇年、西

曆一六四三年に没した天海僧正の蔵書の中に、『新録全像大字通俗演義三国志伝』（喬山堂刊本）や『李卓吾先生批評三国志』（明刊本）などの書名が記録されていることから、生前に天海僧正が『三国志演義』の複数の明刊本を目睹していたことは明らかである。

さらに、八代將軍吉宗の命令によって作成された江戸幕府の蔵書目録としての『御文庫目録』の記述によれば、正保三年、西曆一六四六年には『英雄譜』が「紅葉山文庫」に入ったことがわかる。この『英雄譜』とはすなわち、『三国志演義』と『水滸伝』を上下二段に合刻したものであるから、その頃には江戸幕府の書庫にも『三国志演義』の刊本が入ったことを確認できるわけである。

以上のような個人の読書記録や蔵書目録、あるいは幕府の蔵書目録などを総合して見ると、江戸幕府が誕生して一〇〇年後の一七〇〇年の時点で、『三国志演義』の版本として、『通俗演義三国志』『新録全像大字通俗演義三国志伝』（劉龍伝本）『李卓吾先生批評三国志』『一刻英雄譜』『三国英雄志伝』（楊美生本）など、少なくとも五種類の版本が伝来していたことを確認することができる。現存する『三国志演義』の多くは一六世紀半ば以降に刊行されたものであるから、その後一五〇年足らずのうちに、次々に日本に運ばれていたことになる。ということはつまり、江戸時代の早い段階で既に、日本人が『三国志演義』に親しむための物理的条件は、ある程度整っていた、ということになる。次章で述べるように、一七世紀末には『三国志演義』の日本語訳が初めて刊行されるが、それ以前の段階から既に、何種類もの『三国志演義』が日本国内に存在し、翻訳を受け入れる地盤がある程度整っていたことを窺うことができるのである。

三 江戸時代における『三国志演義』の翻訳と翻案

では、日本において最も早く『三国志演義』の翻訳が刊行されたのは、いつ頃のことだったのか。現段階で明らかにされている限りでは、最初に翻訳が完成したのは、元禄五年、一六九二年のことであったと考えられている。書名は『通俗三国志』、刊行された場所は京都、訳者は「湖南文山」と称する隠士であった。この文山なる人物については、あまり多くの事はわかっていないが、石崎又造氏や中村幸彦氏の研究によれば、翻訳者は一人ではなく、天龍寺の僧侶であった義轍なる人物が途中まで翻訳し、その没後に弟の月堂が引き継いで訳業を完成させたのではないかという事になっている。こうした見解を踏まえ、徳田武氏は、さらに、元禄五年に刊行された『漢楚軍談』の翻訳態度と『通俗三国志』のそれとの類似点に着目し、従来『漢楚軍談』の訳者として知られている章峯・微庵兄弟と義轍・月堂とは、実は同一人物だったのではないかと、との仮説を提示している。いずれにしても、中国の白話小説を日本語に翻訳する仕事に禅宗の僧侶が関わっていたらしい、ということは、江戸時代初期における知識人と白話小説との関係を語るものとして大変興味深いことである。

いかなる経緯で『三国志演義』の翻訳が刊行されるに至ったか、という問題についても、やはりあまり多くの事はわかっていないが、中村幸彦氏の研究によれば、京都の飾屋であった西川嘉長という人物が対馬藩に滞在した際に、京都五山の僧侶が『三国志演義』の講釈を行っているのを偶然耳にしたことが機縁となり、その援助によって京都の書肆・栗山伊右衛門の元で翻訳本の出版が実現したものとされている。これは、対馬の人である古藤文庵の『閑窓独言』の記事に拠ったもので、信頼性の高いものと考えられているが、ここに京都五山の僧侶に関する言及が見られる

ことは、先程も触れたように、宗教と書物との深い関連を想わせる、という点で大変興味深いものがある。

改めて言うまでもなく、洋の東西を問わず、古来、書物の誕生と宗教とは切っても切れない関係にある。『三国志演義』の翻訳が生まれた背景にも、多分に宗教が関係していたものと思われる。五山の僧侶が輪番で講義を行っていたとされる対馬は、九州の沖合の日本海に浮かぶ小島であるが、朝鮮半島に近いため、朝鮮との外交折衝を行う際の際いわば最前線の位置にあたる。海外と直接接する機会が多いだけに、幕府も当地の状況に無関心でいるわけにはいかず、教養のある人物を派遣して中央とのパイプ役を勤めさせる必要があったものと思われる。そこで、「以酌庵」と呼ばれる役所を設置し、そこに京都の寺院から僧侶が交替で赴いて、当地の役人に対して様々な講義を行っていたようであるが、そうした役人のための教養養成講座のようなものが定期的開催され、恐らくその中の教材の一部として『三国志演義』が含まれていたであろう。京都の五山の僧侶が交替でその任にあたったという事実を考えれば、当時既に、京都の仏教関係者の中に、『三国志演義』を含む近世白話文学に親しんでいた人物がいたことになる。翻訳者として名前が挙がっている「湖南文山」という人物にしても、江戸初期に中国白話小説の原文を理解できたわけであるから、相当の知識人であったと考えなければならぬ。そうでなければ、到底『三国志演義』の全文を翻訳することはできなかつたであろう。既述の如く、文山という人物が禅宗の僧侶であった可能性を指摘する説が出されるのも、至極当然の事と思われる。

さて、日本で初めて『三国志演義』が翻訳され刊行されるに至った経緯についてはこのくらいにして、次に、湖南文山の訳した『通俗三国志』の底本としての版本は何であったか、という問題について述べておきたいと思う。先程も言及したように、一七世紀末までに日本に渡来していた『三国志演義』の版本として現時点で判明しているものは

五種類ある。文山はいったいどの版本に基づいて翻訳したのか。この問題については、かつて小川環樹氏が『三国志演義』の現代日本語訳を出版された際、幾つかの版本を詳細に調査され、その結果、李卓吾批評本（呉観明本）であったことが明らかになっている。ただ、長尾直茂氏の最近の研究「近世における『三国志演義』——その翻訳と本邦への伝播——」（『国文学解釈と教材の研究』、学燈社、二〇〇一）によれば、湖南文山が翻訳のテキストとして用いたものは、基本的には李卓吾批評本であったと思われるが、部分的に独自の訳文を挿入した痕跡が見られることから、場合によっては、日本の読者の立場を考慮して、原文にない独自の文章を添えるという操作も行ったのではないかと推測している。いずれにしても、『三国志演義』の日本における最初の完全な翻訳の仕事は、湖南文山という人物によって成し遂げられ、これを皮切りとして、以後続々と様々な翻案本が出現するようになったのである。この点については次章で詳しく紹介することとして、その前にひとつだけ補足しておきたいことがある。それは、やはり『三国志演義』の日本語訳についてであるが、完全な翻訳を成し遂げたのは湖南文山という人物であることは確かであるが、実はそれ以前にも『三国志演義』の一部分を訳出して刊行した人物がいたようである。徳田武氏の研究「本邦最初の『三国志演義』の翻訳——『為人抄』に就いて」（『明治大学教養論集』三四〇、二〇〇一）に拠れば、中江藤樹の著作と推定される『為人抄』という書物の中に、『三国志演義』の「連環計」と「孔明の南征」に関する話柄が挿入されており、恐らくそれも李卓吾批評本に基づいて訳出されたものであろうと考えられている。『三国志演義』の原文と『為人抄』所掲の訳文を丹念に比較すると、直訳ではないものの、確かに『三国志演義』を踏まえて訳出したと考えられる部分が存在するようである。『為人抄』は一六六二年に刊行された書物であるから、仮に徳田氏の指摘が正しいとすれば、湖南文山の完訳本刊行の三十年前には既に、部分的ではあれ、『三国志演義』の翻訳が世に出ていたこ

とになる。

四 唐話学習と『三国志演義』

元禄年間に出版された『三国志演義』の日本語訳としての『通俗三国志』は、人々の間で大いに歓迎されたらしく、その後続々と、日本的にアレンジされた『三国志演義』が刊行されるようになった。日本における『三国志演義』の受容のありかたを詳細に跡づけつつある研究者としては、金沢大学の上田望氏の名前が挙げられるが、『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』の第九輯（二〇〇六年三月刊）に掲載された氏の最近の研究「日本における『三国志演義』の受容（前篇）——翻訳と挿図を中心に——」によれば、江戸時代の正徳（一七一一年）から享保（一七二六年）にかけて空前の唐話（中国語）学習ブームが興り、『三国志演義』などの白話小説を教材として唐話を学ぶ知識人のグループも生まれ、その結果、『水滸伝』や『西遊記』を始めとする白話小説の熱心な読者も現れた。長崎を通じて次々に輸入されてくる中国の書物を通して、日本人は隣国の文化に次第に興味を覚えるようになったものと思われるが、早くから全訳が出版された『三国志演義』なども、当然、人々の大いなる関心を引いたことであろう。こうした中国への関心の高まりを背景として、上田氏はさらに、当時『三国志演義』と関わった人々のタイプとして、以下のよう
な四種類の人々の存在を想定している。（上田望氏前掲論文九・一〇頁）

- (一) 唐話を学び、その学習過程で『三国志演義』を原文で読む。
- (二) 唐話は学ばないが、『三国志演義』は原文で読む。

- (三) 唐話学習熱、白話小説熱、中国ブームに触発され、翻訳された『通俗三国志』やダイジェスト本を読む。
- (四) 原文や翻訳は読まないが、歌舞伎や人形劇、講談などで三国の物語を楽しむ。

これらのうち、(一)及び(二)のタイプに属する人々は、どちらも、『三国志演義』を原文で読みこなすだけの力を持っているため、小説の原文さえあればそれで目的が達成される。そうした人々が江戸時代前期にどの程度存在したのかは、はっきりしないものの、通訳業に携わった「唐通事」と呼ばれる人々や儒学者、中国に渡った経験を持つ禅宗の僧侶たち、さらには私塾での手ほどきを経て独学によって中国語の読解に通じた知識人、などの存在を考慮すれば、一定の人々がこの二つの部類に属していたであろうと推測することができる。また、(三)のタイプの人々も、湖南文山の翻訳が発売された元禄年間以後は、『通俗三国志』やそのダイジェスト本を手元に置いて読みふけり、日本の物語にない壮大なスケールで展開される『三国志演義』の世界を堪能したものと思われる。しかし、(四)のタイプの人々にとっては、『三国志演義』の原本が輸入され、その翻訳が出版された段階でも、「三国物語」はにわかに身近な存在には成り得ず、依然として遠い異国の夢物語であり続けたことであろう。

五 江戸の庶民文芸における『三国志演義』の影響

(一) 絵入り本

上述の如く、文字のみを媒介として異文化に接することの苦手な人々にとって、絵入りの『三国志演義』の出現は、読書意欲を喚起するにあたって画期的な役割を果たすことになった。以下、先程紹介した上田望氏の調査結果に基づ

いて、江戸時代にいかに多くの『三国志演義』のダイジェスト版が刊行されたかを確認しておきたい。上田氏は、日本各地の図書館に所蔵されている『三国志演義』の絵入り本を丹念に調査し、以下のような様々な書物が刊行されていたことをつきとめている。最初に挙げた数字は上田論文の掲載頁を示している。

- (10) ● (赤本) 『三国志』…羽川珍重(一六八五—一七五四)画、享保六年(一七二二)、所蔵機関不明
- (10) ● (黒本) 『通俗三国志』(別名 画解三国志)…鳥居清満画、宝暦一〇年刊(一七六〇)、東京都立図書館中央館加賀文庫、東洋文庫蔵
- (13) ● (黄表紙) 『通俗三国志』…刊年未詳(安永元年刊か?)、東京都立図書館中央館加賀文庫、大東急記念文庫、東北大学附属図書館狩野文庫蔵
- (16) ● 関羽五関破…安永元年(一七七二)、三卷、鳥居清満画、関西大学附属図書館蔵
- (16) ● 孔明赤壁謀…安永元年(一七七二)、二卷、鳥居清満画、関西大学附属図書館蔵
- (16) ● (黄表紙) 『通俗三国志』(別名画解)…天明二年(一七八二)、桂宗信(源吾)画、学習院大学日本語日本文学研究室、上田望他蔵
- (19) ● (黄表紙) 『絵本三鼎倭孔明』…五卷三冊、睦酒亭老人作、北尾重政画、享和三年(一八〇三)刊、国会図書館蔵
- (20) ● 『絵本通俗三国志』…葛飾戴斗二世画、京都池田東籬亭校訂、天保七年(一八三六)〜天保十二年(一八四一)

このように、一八世紀前半から一九世紀中葉までのおよそ一〇〇年間に、様々な種類の「絵本三国志演義」が出版されたことがわかる。これらの『三国志演義』ダイジェスト版の内容に関しては、上田氏の論文に詳しく解説されているので、ここでは省略するが、共通する特徴として指摘できることは、こうしたダイジェスト版にはいずれも、図版が付されている事である。宝暦年間から安永年間にかけて活躍した鳥居清満を始め、羽川珍重や北尾重政、さらには葛飾戴斗など、当時の有名な画家が『三国志演義』の名場面の彩色画を挿入したことによって、文字以外の要素を必要とした多くの人々は、遠い異国の物語に過ぎなかった『三国志演義』の世界を、にわかにも身近なものとして捉えるようになり、『三国志演義』との距離を一挙に縮める効果をもたらしたものと思われる。また、これらの絵入り本の中には、専ら子供や女性向けに発売されたと思われるものもあり、当時の中国ブームにあやかって、広範な読者を呼び込もうとする書肆の逞しい商魂を見てとることができる。

絵入り本の登場に関連してただちに想起されることは、かつて中国においても同様の版本が刊行されたことである。明代後期に福建の建安で刊行された『三国志演義』の多くは、上図下文形式の通俗的なものであり、筆者が嘗てスペインのエスコリアル宮殿で調査した「葉逢春本」『三国志演義』は、まさしくそうした図版入りの版本の最初のものであったと考えられる。識字率などと言うと少々大仰な言い方になるが、文字を自由に操ることができる人がそう多くはなかったであろう明代嘉靖年間において、名場面を視覚的に分かり易く紹介してくれる版本の出現は、まさに画期的なものであり、『三国志演義』の読者層を拡大する大きな契機になったものと推定される。似たような状況は、中国のみならず、日本においても生まれていたわけで、元禄年間に文字だけを媒介として翻訳された『通俗三国志』は、その後、当時の人気画家が新たに参画して図像を加えることによって、大衆化への大きな一歩を踏み出すことに

なったのである。

享保年間以降次々に出版された『三国志演義』のダイジェスト版について、その共通した特徴をもう一つ挙げておきたい。それは、登場人物の容貌や服装が、徐々に日本的にアレンジされていくことである。渡辺由美子氏の論文『絵本通俗三国志』について——その挿絵と成立事情——（『東洋大学文学部紀要』四七、一九九四）や上田望氏の前掲論文の指摘によれば、各々の版によって程度の差はあるものの、中には、関羽や孔明の顔立ちや服装が、中国のそれとは似ても似つかぬ程に変形し、いかにも日本風のものに変わっているものもあるとのことである。その最たるものは、先程挙げた葛飾戴斗の『絵本通俗三国志』に添えられた挿絵であり、そこでの関羽や孔明は、既に中国のものとは全くかけ離れた、非常にグロテスクなものに変形してしまっている。また、そこで駆使されている描写上のテクニックも、それまでの一連の「絵本三国志」とは大いに異なる独特の技法であることも指摘されている。当時は既に、「周曰校本」や「劉龍田本」など、挿絵の付いた原本も複数輸入されていたわけであるから、中国人がイメージする関羽や孔明の姿は日本の画家もよく心得ていたはずであるが、当時の日本人の好みに投じるためもあってか、次第に和風化が進行し、結局、元来の姿を窺うべくもない程に変形していったようである。

思えば、日本人は昔から、国外から異質の文化を輸入する場合、自分たちの風土に合うように適当にアレンジすることに腐心してきた。換言すれば、ある種のフィルターを通して異文化を変形させ、自らの感性に叶うものを取り入れることによって日本的風土との調和を図ってきたとも言える。そのことは、『三国志演義』の輸入についても例外ではなく、図版付きのダイジェスト版を刊行するにあたって、恐らくは同様の操作が加えられたものと思われる。その背景として、上田氏が指摘するように、当時流行していた歌舞伎や浄瑠璃など、日本独自の演芸の影響を考えるこ

とは非常に重要であろう。氏は、『絵本通俗三国志』が生まれた背景について、次のように述べている。

桂宗信が挿絵を描いた頃までは、多くの画家たちは『通俗三国志』を中国の小説としてまじめに受け止め、中国から運び込まれる明清小説や絵画をお手本に中国風の造型を作り出すことに腐心してきた。しかし、江戸後期になると、小説『三国演義』が日本に伝わってから二百年の歳月が流れ、受容の形態が多層化し軍談や浄瑠璃、歌舞伎、講談、浮世絵あるいは翻案物などで三国の物語が人々にすっかり馴染みになったことが、小説や挿図への意識を変え、和風化した戴斗のような挿図を生み出すことにつながっていったのではないだろうか。

(前掲上田望論文二六頁)

上田氏はこのように述べた後、ダイジェスト版に付された数々の挿絵は、それ自体が完結した芸術であり、日本人が長い年月をかけて生み出した『三国志演義』のパロディではないか、と述べている。この指摘は、日本人の異文化受容のあり方を考える上で極めて示唆的であるように思われる。

(二) 浄瑠璃

一六九二年に『三国志演義』が日本語に全訳され、その後更に、様々な絵入りのダイジェスト本が刊行されたことによって、一八世紀初頭には、知識人だけでなく庶民に至るまで多くの読者を獲得し、元禄から享保にかけて、一種の「三国志ブーム」が到来したといわれている。そうした風潮の中で、当然のことながら、三国物語は当時の様々な

芸能に素材を提供することになった。文字や挿図によって楽しむ小説類だけでなく、舞台芸術の分野にまで三国物語の影響が及ぶようになるのは、もはや時間の問題だったのである。

「歌舞伎」は、江戸時代に盛んに上演された、舞踊を伴う日本独自の演劇であるが、その題材としては史実や伝説さらには当時の様々な社会現象をも取り込むことが可能とされていた。記録によると、この歌舞伎の中に「三国志」という外題で実際に上演されたものがあつたことがわかっている。時は宝永六年、西暦で言うと一七〇九年のことで、大坂の嵐三十郎座で初演され、仲達と諸葛孔明が登場したようである。残念ながら、具体的にどのようなストーリーをもったものは不明であるが、登場人物の組み合わせから考えると、劉備亡き後、蜀の舵取りを任された孔明が己の死期を悟り、仲達を相手に一世一代の大芝居を打つ、かの「死せる孔明、生ける仲達を走らす」の一段が寸劇として演じられていた可能性が高い。

江戸時代に流行した演劇としては、歌舞伎以外に、もう一つ「浄瑠璃」がある。この「浄瑠璃」は、「浄瑠璃太夫」と呼ばれる講釈師が、弦楽器である三味線の伴奏を伴って、舞台上の役者の所作や心情を事細かに解説するもので、江戸時代初期から庶民の間で広く流行した。元禄時代になるとそれは人形浄瑠璃に発展し、竹本義太夫・近松門左衛門を始めとする様々な流派を生み出し、江戸後期に至るまで庶民の絶大な人気を博した。このような社会背景の中にあつて、元禄年間に既に日本語に訳されていた「三国物語」が浄瑠璃の世界に題材を提供することになったのは、むしろ自然の成り行きであつたと考えられる。政治の中心地であつた江戸だけでなく、文化の中心地とも言うべき大坂においても、三国物の浄瑠璃が盛んに上演されたと言われている。そのあたりの事情は、鳥居フミ子氏の最近の研究「中国的素材の日本演劇化——『三国志演義』と浄瑠璃」(『東京女子大学比較文化研究所紀要』第五九卷、一九九

八)と題する論考の中で詳しく考察されているので、ここではその概要を簡単に紹介するに留めたい。

鳥居氏によれば、元禄時代に入ると、江戸の土佐浄瑠璃や大坂の近松浄瑠璃の中で、『三国志演義』を意図的に活用した脚色が登場するようになり、享保年間以降、浄瑠璃の世界にも三国物がしばしば取り込まれるようになったとのことである。論考の中では、土佐浄瑠璃の例として「通俗傾城三国志」や「続三国志」、及び「末広昌源氏」が、また、近松浄瑠璃の例として「国性爺後日合戦」と「信州川中島合戦」が挙げられているが、両者の間に趣向の違いはあるものの、これらの演目はいずれも、『三国志演義』の登場人物とその脚色を強く意識しつつ、舞台や筋書きを日本風に置き換えたものであり、当時の観客は、それが『三国志演義』のパロディーであることを十分に心得た上で鑑賞していたと結論づけている。

(三) 洒落本

一八世紀後半になると、三国物語は江戸庶民の間に広く知れ渡り、原書の筋書きを踏まえつつ日本風にアレンジした物語が次々に現れるようになる。明和年間(一七六四〜一七七二)から天明年間(一七八一〜一七八九)にかけて江戸を中心として発達した「洒落本」と呼ばれる小説は、そうした風潮をよく反映したものと考えられている。ここで言う「しゃれ」とは、一種の言葉遊びを指し、ユーモアを含んだ軽妙洒脱な対話を次々と繰り出して、読者を遊戯空間に招き入れることを目的とした、一種の遊戯文学といえることができる。

三国物を扱った「洒落本」としてよく知られているのは、千代丘草庵主人の手になる『讚極史』である。寛政七年以降の作と伝えられているが、はっきりした制作年はわかっていない。「讚極史」と「三国志」は、日本語では同音

であり、『讚極史』の作者は、『三国志演義』を意識した上で、敢えて書名の文字を変えているのである。つまり、書名そのものからして既に、一種の「遊戯（あそび）」の精神に基づいているといえる。この『讚極史』に関しては、既に、徳田武氏や中川諭氏の研究が備わっているので、ここでもそれらを簡単に紹介しておきたい。

まず、『讚極史』の内容は以下のようなものである。中川氏の論考「江戸時代後半における「三国志演義」の受容——洒落本「讚極史」」（『集刊東洋学』七一、一九九四）においてまとめられている梗概を借りつつ、簡単に紹介しておくことにする。

蜀の玄德は孔明に諸事万端を任せて、自分は「徳玄」と名前を変え、孔明の故居「臥龍岡」を「臥楽岡」と改名してそこで暮らしている。そこへ呉の孫権が現れ、お茶や菓子の話に交えて日本の流行について話す。折よく、魏の曹操も訪ねて来て、三人で当時のトピックなどを話題として互いに茶化し合った後、色街に繰り出すことで相談がまとまる。

話はこれで全て終わりである。以上の梗概からもわかるように、この『讚極史』は、ストーリーらしいストーリーをもたない、単純極まりない一場の遊戯文学であるが、そこで繰り広げられる対話を仔細に検討してみると、何気ない言葉遣いの背後に、『通俗三国志』の細部を踏まえた巧妙なやりとりが展開されていることに気付く。徳田氏は、ゆまに書房から刊行された『李卓吾先生批評三国志』（『対訳中国歴史小説選集』、一九八四）の解説の中で、劉備・孫権・曹操の三人の会話の多くが『三国志演義』を踏まえて成り立っていることを指摘し、その箇所を一々対照して

示している。また、中川氏は、前掲論文において、具体的な固有名詞が現れない場面においても、『三国志演義』の知識が縦横に活用されていることを指摘している。つまり、『讚極史』こそは、「洒落本」特有の「あそび」の精神を存分に発揮した典型的な作品の一つであり、その詳細を明らかにすることは、江戸の庶民が『三国志演義』をどのようにとらえていたかを探る上で極めて重要な意味をもっている。この点に関しては、先程挙げた徳田氏の論考の中にある次の言葉が、要点を尽くしているように思われる。

『讚極史』は『演義』の硬い話を江戸の市井の卑俗な話に転義して楽しむ、というパロディを意図している。そのパロディを理解するためには、引用部分が『演義』のどの回のどのような話かを知っていることが必要である。その知識が無いと、このパロディの妙味を味わうことはできない。このような性質の作品を著すことによって、作者はおのれが『演義』の細部にまで通曉していることを誇示している。そして、読者にも自分と同等の知識を持って読むことを要求している。『演義』の細部にまで精通していること。それは江戸言葉でいえば、『演義』の「穴」を憶えていることだが、作者はこの作品において『演義』の「穴」をうがったのであり、読者は「穴」を知っていることを要求されているのである。かくて、『讚極史』は、一方では江戸のトピックを当てこんだと同時に、他方では『演義』の「穴」をうがった、という作品なのだ。

「三国物語」の世界が広く人々の間で認知されるようになった事を背景として成立した「洒落本」「讚極史」は、『三国志演義』の世界がその細部に至るまで深く人々の心に染みこんでいたことを物語る確かな証拠であり、受容の

深さを端的に示す資料であると同時に、それは一八世紀末の江戸庶民文化の様相を伝える貴重な資料でもあると言うことができるであろう。

六 江戸時代の日本人と『三国志演義』（まとめに代えて）

以上、江戸時代初期に日本に渡来した『三国志演義』が、その後いかなる経緯をたどって日本の国内で受容されたか、また、受容される過程で『三国志演義』がどのように変容していったか、さらには、そこに江戸時代に活きた庶民の感覚が如何に反映されているか、といった問題について、先人の研究成果を紹介しつつ概観した。

既に見てきたように、他の文化を吸収する場合と同様、『三国志演義』の受容に関しても、いったん翻訳が出版されると、それは様々な形で日本古来の芸能の中に取り込まれ、登場人物の容貌や服装、さらにはその性格までも、元来備わっていた姿が次第に変形し、日本的にアレンジされていく過程を確認することができる。

日本は周囲を海に囲まれた島国である。そのせいもあってか、異質の文化が流入した場合にも、その影響を直截的に受けることはむしろ稀で、時間をかけてじっくり吟味し、自分たちの風土に合致するものを取捨選択した後に初めて取り込む余裕があったように思われる。この点は『三国志演義』の場合も例外ではなく、翻訳そのものもただちに受け入れた人々もあったが、一方で、日本的にアレンジした各種の挿図付きのダイジェスト版で楽しんだ人々も多数いた。それどころか、江戸時代に盛んに上演された歌舞伎の影響を受け、換骨奪胎した「似て非なる」『三国志演義』の世界に遊んだ人々さえあったのである。『三国志演義』受容の過程をたどることは、日本人が異質の文化を吸収する際の一つのパターンを明らかにすることにもつながる。事は、異文化受容に関する様々な問題とも絡む故、

今後大いに研究する必要があるように思われる。

また、江戸の庶民文化については、近年、日本において様々な角度からの研究がなされ、鎖国政策による閉鎖性が却って独自の文化を醸成する効果をもたらしたことが明らかにされるとともに、当時における庶民の文化程度の高さが次第に判明しつつあるが、『三国志演義』の受容に関しても、やはり、そうした江戸庶民文化の強い影響を考へるべきであろう。こうした分野の研究は、これまで主として国文学研究者によって進められてきたが、中国文学研究者も、中国語の原文を理解できるという利点を生かして、今後は比較文学的立場からの研究を積極的に進めるべきではないかと考へる。

(二〇〇七年六月九日 脱稿)